

## 第2章 研究の目的

第1章で述べたように、快適な通勤を提供する『通勤ライナー』は利用者にとって非常に便利である。また鉄道会社にとっても、利用者からライナー料金や特急料金といった形で追加料金を徴収できるのは魅力的であろう。このように、『通勤ライナー』は利用者と鉄道会社の両方にとって、魅力的であるという側面を持つ。

しかしながら、首都圏の通勤ラッシュ、特に朝ラッシュは大変激しいものである。多くの路線でピーク時には2～3分間隔といった高頻度で列車が運行され、それでもなお、列車は満員状態である。このような余裕のない状況である朝ラッシュ時に、一般列車と比較して定員の少ない『通勤ライナー』を走らせてしまえば、一般列車の混雑はさらに激しくなってしまう、場合によってはそのキャパシティを超えてしまうかもしれない。

以上のように、鉄道会社にとって、朝ラッシュ時に『通勤ライナー』を走らせるかということは、非常に悩ましい問題であるものと思われる。そこで本研究では、まず朝ラッシュ時の『通勤ライナー』の運行状況を分析する。そのうえで、一般列車と『通勤ライナー』とがどのようにすれば共存できるかという点について考察する。